



大阪府北部地震における鉄道利用者の行動と意識の把握調査

申請区分 研究促進費（個人）

実施期間 2018年6月18日～2019年2月20日

実施代表者 関西大学・社会安全学部・教授・元吉 忠寛

成果の概要

2018年6月18日7時58分ごろ、大阪府北部を震源とする地震が発生した。朝の通勤ラッシュの時間帯を直撃し、関西の鉄道各社は運行を見合わせ、多くの人が電車内に閉じ込められたり駅に滞留したりして大きな影響を及ぼした。大都市においては、乗客の安全を確保しつつ、都市交通機能をいかに早く回復させるかは大きな課題の一つである。東日本大震災における帰宅困難に関する実態調査は行われているものの（廣井, 2011）、これまで通勤時間帯に大都市を地震が襲ったことはなかったため、このような場合に、人々がどのような行動を取るのかという実態は正確には把握されてはいない。

今回は、わが国において多くの通勤者が公共交通機関を利用中に地震が発生したはじめてのケースであり、この実態を正確に把握する目的で基礎資料を収集し、災害時の鉄道会社の情報提供の仕方や通勤行動の意思決定対策に向けた方針を模索することは一定の意味があるといえる。そこで本研究では、今回の地震発生時に通勤のために鉄道を利用していた京阪神圏の働いている者を対象にして、発生後の行動分析と心理的な特徴について把握した。

2018年6月26日から27日に大阪府、京都府、兵庫県、奈良県に在住の働いている方6,504名を対象にアンケートへの協力を求め、地震発生時に、通勤中で電車の中にいた436名と駅構内にいた64名の計500名（男性394名、女性106名）に対してより詳しく調査した。地震の後、勤務先に向かった人が304名で61%、自宅に向かった人が196名で39%であった。自宅に向かった人の多くも勤務先に向かおうとしたが、たどり着くことができずに断念していたことが明らかになった。災害時に無理をしてでも勤務先に向かおうとする人々の行動は、社会的な混乱を大きくする可能性があることを指摘できる。



実施成果

[雑誌論文] 計 (1) 件 うち査読付論文 計 (0) 件
(著者名、論文標題、雑誌名、巻、発行年、最初と最後のページ、査読の有無)

1. 元吉忠寛、大阪府北部の地震における鉄道通勤者の行動実態調査、社会安全学研究、10、2020、無

[学会発表] 計 (0) 件 うち招待講演 計 (0) 件
(発表者名、発表標題、学会等名、発表年月日、発表場所)

[図 書] 計 (0) 件
(著者名、書名、出版社、発行年、総ページ数)

[出 願] 計 (0) 件
(発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別)

[取 得] 計 (0) 件
(発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別)



Kansai University Medical Polymer (KUMP) International Symposium

申請区分	国際シンポジウム等助成金
実施期間	2019年1月24日～2019年1月25日
実施代表者	関西大学・化学生命工学部・教授・大矢 裕一
実施分担者	関西大学・システム理工学部・教授・宇津野 秀夫 関西大学・システム理工学部・教授・小谷 賢太郎 関西大学・システム理工学部・准教授・田地川 勉 関西大学・化学生命工学部・教授・岩崎 泰彦 関西大学・化学生命工学部・教授・葛谷 明紀 関西大学・化学生命工学部・教授・田村 裕 関西大学・化学生命工学部・教授・平野 義明 関西大学・化学生命工学部・教授・古池 哲也 関西大学・化学生命工学部・教授・宮田 隆志 関西大学・化学生命工学部・准教授・柿木 佐知朗
成果の概要	

本国際シンポジウムは、「KU-SMART(Kansai University Smart Materials for Advanced and Reliable Therapeutics)」プロジェクトのメンバーによる研究成果の発進と、共同研究への発展を視野に入れた国内外の研究者との人的交流を目的として開催された。医療の進歩に寄与する革新的なマテリアル・デバイスの開発とその臨床展開に焦点を当て、この分野を牽引する著名な研究者を欧米、アジアからの8名、国内から4名それぞれ招聘した。シンポジウムは2日間の日程で、基調講演2件、招待講演10件、プロジェクトメンバーによる研究発表13件、大学院生を中心としたポスター発表19件が行われた。基調講演では東京女子医科大学 岡野光夫名誉教授に細胞シート工学の確立と再生医療への応用について、また、韓国 Ajou 大学の Ki Dong Park 教授に酵素反応を利用した *in situ* 架橋ヒドロゲルの医療応用についてお話をいただいた。いずれも世界を代表するバイオマテリアル研究の第一人者であり、講演は卓越した研究成果の紹介にとどまらず KU-SMART プロジェクトの指針となる多くの要素も含んでいた。一方、招待講演は今後のバイオマテリアル分野を担う若手・中堅の研究者に依頼した。様々な斬新かつ独創的な研究課題が紹介され、バイオマテリアル研究における最新の情報を共有することができた。準研究員として本プロジェクトに参画している大学院生を中心としたポスター発



表では、発表者がショートプレゼンテーションを行い、招待講演者による審査のもと優秀発表賞を選出した。大学院生が英語でコミュニケーションを図る良い機会となった。

本シンポジウムには国内外から企業、大学関係者、一般参加者を含め 123 名に出席いただき、終始白熱した議論が展開された。また、研究者同士の関係もより親密になり、発展的かつ長期的な研究交流が実施されるきっかけにもなった。

以上のように、本国際シンポジウムは研究成果の発信、情報共有、人的交流、人材育成、すべての面において当初の目的を十分に達成できたもの確信している。



Perfection and Imperfection (完全と不完全)

申請区分	国際シンポジウム等助成金
実施期間	2018年10月8日～2018年10月8日
実施代表者	関西大学・文学部・教授・ジェームズ・カーワン
実施分担者	関西大学・文学部・教授・中谷伸生 関西大学・文学部・教授・蜷川順子 関西大学・文学部・教授・平井章一 関西大学・文学部・准教授・門林岳史
成果の概要	

2018年10月8日に、8名の登壇者による国際シンポジウム「完全と不完全－不完全の美学：哲学、芸術、文化」を実施した。

ピーター・チェイニー（島根大学）は、「不完全主義美学と包摶のエトス」において、「不完全主義」を提案し、開放性と包摶性に寄与するその倫理的利点を扱った。山口恵里子（筑波大学）は「リチャード・ロングの日本における歩行作品－転移」において、現代美術家ロングの活動を、完全性を期待する芸術に抗い、「不完全であること」の美学を追求していると評価した。大石和欣（東京大学）・小林康夫（青山学院大学）は、「草の美学－西脇順三郎を中心にして」において、西脇の「雑草の美学」が、「不完全美学」として浮かび上がる位相を日本近代の文脈のなかで検証した。ジョセフ・S・オリアリーは「不完全の勝利：イエーツの『学校の子供たちの間で』」において、詩人が、「魂」の非人間的完全と「自己」の粗野な主張との間で揺れ動く、生命や想像力の多様な可能性を探求したと見なした。アンドレア・バルディエーニ（南京大学）は、「都市美学における不完全の政治的含意」において、タッギングが、都市的な完全という美的理念の排他的性格をさらけ出すということを論じた。フィオーナ・トムキンソン（名古屋大学）は、「アイリス・マードック著『偶然の男』における不完全の倫理と美学」において、倫理と美学における著者の（不）完全のヴィジョンを、弁証法的観点から提示した。グレゴリー・ダン（宮崎国際大学）は、「不完全の詩学：松尾芭蕉とナサニエル・ホーソーンによる紀行文における不全性、断片、廃墟の研究」で、紀行文の比較研究を通してその不完全の美学について考察した。ジェームズ・カーワン（関西大学）は、「完全の美学」において、完全または不完全だと見なされる決定的要因は、理想を捉える主体の知覚と、対象の起源を想像して楽しむことができる主体の許容との双方にあると結論づけた。

このように、芸術や音楽を通した人間の感性の領域において「完全」と「不完全」を問い合わせ、「不完全」の倫理的文化的重要なを確立することに努めた。

